

原点忘れずに

「人の命にかかわる記事を書いてくれ」。2010年3月に国土交通省の担当となる際、デスクから心構えとして預かった一言だ。国交省は幅広い分野を扱う巨大官庁ゆえ、取材テーマは際限なくある。「社会部の記者として何をどこまで追えばいいのか」と、多少の不安を抱えていた私は、この一言で胸のつかえが取れた気がした。

思えば入社以来十数年となるが、キャリアのほとんどは事件・事故の担当として過ごしてきた。初任地の浦和支局(現・さいたま支局)で初めて書いた原稿は交通事故だった。夏休みのある日、学習塾に向かう自転車で乗った女子中学生が、横断歩道を渡る際に信号無視した乗用車にはねられて死亡した事故、と記憶している。

取材するのも、原稿を書くのも初めてだった私はピュアだった。人の死を身近に感じて、「なんてかわいそ

うなんだ」と思うだけだった。警察署の副署長にかじりついて取材した結果を、すべて原稿に書き込んで警察担当のキャップに渡した。

「お前はアホか」。原稿を見た瞬間にキャップの怒声が飛んできた。そして、こう付け加えた。「こんなに長いのが紙面に載る訳ないだろ。25行にしろ」。「人が死んでいるのに、たったの25行?原稿用紙1枚以下じゃないか」と、違和感を感じたが、泣く泣く、命じられるがままに原稿を「処理」した。これが記者としての原点だ。

しかし、時は過ぎ、記者として経験を重ねていくと、ニュース価値の判断が自然と身に付いていった。取材者として数え切れないほど人の死を原稿にしてきた。いつしか当たり前のように、死亡事故を25行の原稿で処理する自分がいた。時間的な制約もあり、人の死を自分に重ねていられなくなっていた。

昨年1月に長男が誕生した。33時

間にわたり陣痛に苦しみ続けた妻のそばにいたせいかわ、出産の瞬間、涙がこぼれた。命と正面から向き合う経験ができ、忘れかけていたピュアな感覚を取り戻せたような気がした。

子育てに奮闘する妻がある日、泣きじゃくりながら電話してきた。虐待死した乳児の記事を新聞で読んだ、とのことだった。妻も以前は記者をしていたが、もはやその面影はなく、「なんでこんなことが起きるの」と、母親として感じたままを必死に伝えていた。

仕事の話に戻そう。国交省担当となった後、7月の埼玉県秩父市で起きた県防災ヘリコプター墜落、8月に香川県沖で起きた海上保安庁のヘリコプター墜落など大きな事故を取材した。事故原因や再発防止策を念頭に置きながら取材したつもりだが、海保のヘリ事故は残念なことに、5人が死亡した事実よりも、海保側の報道機関への説明不足が「隠ぺい」と

大きく伝えられた。

10月には全日空系機が、管制ミスにより北海道・旭川空港近くで山肌に衝突する危機に遭遇した。運輸安全委員会の調査では、同機に搭載されたGPS(対地接近警報装置)が作動したが、機長が回避措置を取らなければ、20〜30秒後には乗客乗員57人を巻き込む大惨事となった可能性もあった。

航空局から日々、航空機のイレギュラー運航情報が卓上に届く。記事にすることは少ないが、その中の一枚に、未来に起こる大事故の芽が潜んでいるかもしれない。失われた命は二度と戻らない。原点を忘れずに取材を続けていきたい。

